



秋田県歴史研究者・  
研究団体協議会の発足

1993年11月、東北地方に初めて開設された秋田県公文書館は、県民に大きな刺激を与えることになった。県庁地下の記録書庫室に保管されてきた県庁文書と、県庁や県立博物館、県立図書館などに分割保管されてきた秋田藩庁文書とが一括して公文書館に移管されることになり、保存と研究利用の観点からその有効性と利便性が期待された。しかしそれは同時に、藩庁文書から県庁文書へと連続する質量ともに全国屈指の文書群とは裏腹に、県内村方・町方の地方文書に関しては、その所在状況も確認されないまま、ほぼ手つかずの状態にある現実に目を見開かせる契機でもあった。また藩庁・県庁文書群にその多くを依拠して昭和30年代に編纂された『秋田県史』が既に過去のものであることも否応なく気付かせてくれた。こうした背景のもと、同月秋田大学史学会の主催で「歴史資料の保存と活用をめぐる」と題するシンポジウムが開かれ、熱のこもった討論が繰り広げられた。そのことは、同公文書館の開設関係記事とならんで既に本誌第3・5号のアーカイブズ・ネットワークに紹介されている。このシンポジウムの成果を単発的に終わらせることなく、継続的な文化運動として展開していこうという熱意が本協議会の設立となって結果した。

秋田県内には考古学・民俗学を含めて約30を越える数の歴史研究団体が活動を続けている。いずれも10年20年と伝統ある実績を積み重ね、地域に根をおろした研究活動を展開してきた。しかし、それらが相互に情報を交換し合う機会は少なく、また研究を志す個人がそれにふさわしい研究の場を得られないという事態も見られた。あるいは、全国的な研究動向と水準の中に自らを位置づけて見ようにも、それを判断する情報が不足していたことも否定できない。そこで、1995年10月15日の

創立大会をもって歴史・考古・民俗の三分野で活動してきた個人と研究団体とが、それぞれの伝統と個性を尊重しつつ、相互に情報交換をはかり研究の質的向上を目指すべく秋田県歴史研究者・研究団体協議会（略称、秋田歴研協）の発足へと結びついた。21世紀に向けて秋田県域にもこれまで以上に開発の波が押し寄せようとしている。会則には、文献史料は言うまでもなく埋蔵文化財や民俗伝統まで含めた広い意味での歴史資料全般について、その保存と活用に関する研究と提言を行うべきことが盛り込まれることになった。

堅苦しく、長々とした名称にこだわったのは、歴史の研究に志す個人と団体が自由に加盟し、意見の交換をしあえる連絡調整機関の実態を表現したかったからに他ならない。一般には研究者の言葉さえ窮屈なものだが、歴史・考古・民俗の各領域から、自らの郷土を、あるいは自分の生活する地域をそれぞれの方法で理解しようとする営みと解していただきたい。その結果、会員数は県の内外から既に500名を越えるまでになっている。秋田の地域研究に実際に携わらずとも、秋田に関心を持つ方々に入会していただいて本協議会をご支援願いたい。私たちは歴史研究の裾野を少しでも広げたいと考えている。そのために、個人の年会費を1000円、研究団体の加盟は年間2000円と定めた。毎年秋に大会をもって研究発表と公開講演等を企画し、経常的には年3回程度の会誌の発行を主たる活動として動き出した。96年3月に「秋田歴研協会誌」の創刊号を発行した。B5判約20ページ前後の小冊子だが情報誌に徹し、秋田に関わる文献情報、発掘情報・講演会・各種展示会などの催し物情報、それに加盟研究団体の活動紹介や研究動向に関する記事を収録することにしていく。県外で刊行された秋田関係の文献情報をいかに早く的確に収集し会員に紹介していくかが今後の課題と言えよう。本誌のような全国的専門誌を始め、各県レベルで組織されている研究団体と幅広くネットワークを形成し、情報の交換に努めたい。

秋田県では、秋田市や能代市で市史編纂事業が進行し、編纂を終えた大館市では郷土博物館が開館の運びとなった。秋田県公文書館には、これら自治体史の編纂に携わる市町村は勿論のこと、県内外を結ぶ連絡調整役としてそのセンター機能を発揮してもらいたい。全史料協の96年度大会も秋田県で開催されることになっている。このような動きに歩調をあわせるべく、本協議会は民間団体としてその力を結集し、研究の質的向上を目指そうとするものである。県史の編纂事業を進めてきた所ではどこでも、その準備室段階から県史に関わる多くの情報が集積され編纂に役立てられてきた。その意味で、本協議会の情報収集活動は『新秋田県史』編纂への大きな礎になるに違いない。関心のある方は、是非入会していただきたい。郵便振替口座・秋田歴研協02510-2-4343 渡辺英夫・秋田大学